に対抗して、そこへの思いやりを仕事と結び付ける可能性はないかという追求がさまざまな形で始まっている。また、利潤第一主義に犯された食品産業の中で有害食品が横行する今日、自分たちで顔の見える関係の中でお互いに安心できる食べ物を生産したり消費していくネットワークはないのかという試みがどんどん実現されている。さらには、農業や子育ての中でもそれを組織し合って、新しい仕事を開拓し始めている。

これまで大資本の採算原理だけに支配されがちだった社会の中から、働きがいと生きがいを結合し、新しい仕事と生き方を通じてお互いを支え合い、助け合う可能性が追求され始めた。ことによったら、インドの女性たちの運動のように自治体や政府にも働きかけて、女性たちが新しい生き方と仕事の仕方を創り出すべき時代が始まっているのかも知れない。そんな全国の新しい経験交流の場、新しい時代の創造の場となって欲しい。

第5分科会

子育て・教育の協同と協同組合

輝く青春と協働＝自立への力を育む

―見晴台学園のとりくみ―

田中　良三（見晴台学園学園長・愛知県立大学教授）

私の中の見晴台　　鬼頭　歩

私は学習障害児の高校、見晴台学園の専攻科の学生です。良い先生に恵まれ楽しい良い学校なのですが、一つ困った事があります。

それは、よそで学校の名前を聞かれた時に無認可できちんとした名前がないので答えにくいという事です。二年前、「見晴台学園です」と答えたら、「そんな学校あったの？」と聞かれ細かく説明して納得させなければならなくなった事がありました。

それで今は、専門学校、看護学校等色々言っていますが、そんなのが続けば私の様な人間でもさすがに良心がうずきます。

言いにくいという理由で学校の名前を外でごまかしたりすれば、本当に学校を愛している事にならないでしょう。しかし周囲の人がみんな何かしらそういう身分証明のような肩書きを持たなければと思います。

皆さんはこれについてどう思いますか。

この文章は、今年の7月2、3日、愛知で開かれた第6回障害者の青年期教育研究全国集会で、見晴台学園の生徒たちが発表したうちの一つである。彼（女）らは、この集会に学校教師、施設職員、学生、父母たちと共に実行委員として参加した。自分たちの要求を持ち寄って、ディスコ、ボーリング、バーベキュ、ハイキングなどの楽しい企画を立てて取り組んだ。また、全体集会では全国から集まった人たちを前に花笠音頭を踊った。

人間関係をとり結ぶことが苦手な学園の生徒たちであるが、いま彼（女）らは、輝き、いろんな人たちと目的を一つに集会の中身を創り出し、苦楽を共にする人間らしい協働＝自立への力を育みつつある。

高校へ行きたい、友だちがほしい

1990年4月、学習障害児親の会「かたつむり」（名古屋）を母体に、「学習障害児の高校教育をもとめる会」を運営主体とする、わが国初めてのＬＤ（学習障害）児のための無認可5年制〝高校〟見晴台学園が開校した。

それまで、「かたつむり」（1982年10月発足）では、遊びの教室、算数教室、子育て実践報告会などＬＤ児と親の願い・要求に立つ多彩な活動を展

開してきていた。そのなかで、中学生グループでは深刻な進路問題について学習会をもったり、高校見学などに取り組んでいた。しかし、この子どもたちを受け入れてくれる学校はなかった。何とか入学できたとしても、通学に片道3時間もかかったり、いじめに遭ったり、大変な苦労を強いられていた。それならばいっそのこと、自分たちの手で〝高校〟をつくろうと親たちは立ち上がったのである。

このように、ＬＤ児のための高校づくりが、なぜ愛知からはじまったかといえば、まず、ＬＤ児の親の会による活発な自立的主体的な活動があったことである。また、この時期、愛知県は高校進学率が全国最低の90％前後と高校の門戸はきわめて狭く、さらに、全国に先駆けて公立高校複合選抜入試制度が導入されようとしていた。このような中で、学習に遅れや困難をもつ子どもたちはますます高校進学が難しくなるという愛知の地域が抱える殊更に厳しい教育事情が背景をなしていた。こうして、1990年代の幕開け、見晴台学園は、ＬＤ児たちの発達と学習の権利要求に応えることを通して、すべての子どもたちの高校全入をめざす地域教育運動の一環として出発したといえる。

わかって楽しい授業づくり

5年目に入る学園には、現在、35人の子ども（うち、女子8人）と、教職員25人（専任10人、非常勤15人）がいる。青年期を迎える子どもたちが輝く教育について、わかって楽しい授業づくりについて、これまで試行模索しながら中身づくりをすすめてきた。

現行カリキュラムは、1～3学年の〔基礎教養課程〕と、4・5学年の〔職業準備教育課程〕に大別される。

〔基礎教養教育課程〕は、考える力、ゆたかな自己表現力をつけることを目的とする〈認識と表現〉と、自分たちの生活をつくり将来を考える〈生活と自治〉の二つの柱から成る。

〈認識と表現〉は、「芸術と文化」、「技術と人間」、「運動文化とからだ」、「自然と社会」、「言語と数量」の5分野である。このうち、「言語と数量」は、英語、朗読、漢字、古典・諺、手話、数と生活の6メニュー、「芸術と文化」は、アート、ミュージック、メディア、カッティング・アートの4メニューで、学年を越えた選択制を採っている。

〈生活と自治〉は、「ホームルーム」、「生徒会」、「自由課題研究」、「人間シリーズ」、「行事」（新入生オリエンテーション合宿、キャンプ、登山、収穫祭、スキー旅行など）である。

総合学習として米づくりに取り組んでいる。

〔職業準備教育課程〕は、社会に巣立つための準備として、働くための作業技術や態度を学ぶだけでなく、余暇のすごし方や趣味など生活面での自立につながることをめざしている。

ここでは、講義、見学・学習、授業を三位一体とする〈職業人教育〉と、〈生活者教育〉としての「趣味・特技を磨く」、「宿泊生活訓練」、「卒業研究」、「各種免許・資格への挑戦」、「グループ自主旅行」、「研修旅行」に取り組む。

子どもたちは、縦割りの2つの〝ゼミナール〟（クラス）に分かれ、午前は選択クラスで、午後は主に〝ゼミナール〟単位で、自分史と外国語の「教養コース」、木工、ステンシル、ソーイング、絞りの「制作コース」、点字、朗読、手話の「福祉コース」、アウトドアライフや調理実習の「LIFE EXPERIENCE」、日常生活の知識を学ぶ「生活基礎学習」に取り組んでいる。

学園ではまた、「仕事さがしは自分さがし」を基本に、卒業後の就労と生活を保障するための職場・進路開拓に取り組むとともに、生涯にわたるであろう自立への長い道程をサポートしていく「自立センター」（仮称）づくりをめざしている。

親も教師もともに学び育ちあうなかで

学園では、父母が運営に参加するだけでなく、教育内容・授業づくりにも参加する。さらに、学園の行事的教育活動は、学生や地域の人たちにも広く開かれている。

その中で、私たちは、いま、教師も父母も関係

者の全てが、ともに学びあい、育ちあい、新たな教育的価値を創造し、共有しあってはじめて、子どもたちも十全に成長・自立をはとげていくのではないかという思いを強く抱きはじめている。子どもの発達・学習権の保障をめざす学校は、自ずと教育における開放と協同と創造・発達の原理に立つことが求められるのであろう。

学園では、学年クラス制をやめ、縦割クラス制をとっている。クラス編成も担任教員も子どもたちが決めていく。教育内容はメニュー方式を増やし、子どもたちがより自分の興味や関心にもとづいて選択する。青年期教育では、とりわけ、このように、子どもたちに教育の自治と自己決定と選択性が保障されなければならないと思われる。

子ども・国民のための学校は、学習労働における子どもの最善の利益を追求し、教師だけでなく、父母、関係者による相互の参加協同システムの上に新たな教育労働を創造・成立させていくことである。そして、ここに生みだされる教育活動は、それ自体、子ども、親、教師、関係する者全ての発達の自己運動を包摂するのである。

さて、見晴台学園は、来年4月から刈谷市に移転する。小さな校舎を建て、現在コミュニティスクールづくりへの大きな夢見て。

第6分科会

文化の協同と協同組合

お互いのあるものを　出し合い　お互いに　いただく

松田　みつ子（歌舞劇団・田楽座）

生まれる（今を生きる田楽法師に）

田楽座は、1964年。民俗芸能の宝庫である信州は伊那の谷に、専門の創造団体として創立されました。

その昔、田楽（でんがく）は、わが国の中世の代表的芸能の一つで、田植えの時に太鼓・鼓・ササラを打ち鳴らして、早乙女たちを励まし、豊作を祈願したことから始まったと伝えられています。

平安朝の終りになって、それ以前から中国より渡ってきた散楽（さんがく）と呼ばれる音楽芸能のなかから、曲技やこっけいわざをとり入れ、神社・寺院の神事に用いられる様になりました。

この仕事にたずさわったのが田楽法師です。この後、演劇風の所作をとり入れた田楽能も加え、大いにさかえ、今では各地の郷土芸能の中にその影響を残しています。

労作のなかからおこり、大胆に諸芸能をとり入れて自分のものに消化し、神社・寺院をはじめいたる所で演じ歩いて、芸能をみがきあげていった田楽と田楽法師の由来にちなみ、働くことと暮らしのなかの喜怒哀楽を民俗芸能のなかに求め、客席と舞台の交流を通じて新しく発展させたいと願う、私たち一座の名前にしました。

酒のみから子どもまで、誰にも好かれる庶民の